

# 介護の現場から

■中

「入院治療から在宅療養へ」という流れが進む中、患者の自宅を訪ねて、生活を支える「訪問看護師」の重要性が高まっている。「看護の知識を存分に発揮できる場」として、やりがいを持って働く人は多い。

「こんにちは。調子はいかがですか」。兵庫県西宮市にある寝たきり女性(74)宅に、同市訪問看護センターの山崎和代さん(43)の明るい声が響いた。山崎さんは重さ75キロもあるかばんから血圧計を取り出し、「血圧が高いですね。変わった様子はありませんでしたか」と傍らで介護する夫(73)に問いかけた。「床ずれは、指示してもらった通りにやっただけで、きれいに治りました」。そんな報告に笑顔でうなずいた。

山崎さんは14年前、大学病院勤務などを経て訪問看護師に転身した。退院したばかりの患者が体調を悪くして再来院する姿を見て、「地域での療養生活を支援したい」と決意した。管理者となった今も

多い日は5軒の利用者宅を訪問する。「病気のケアだけでなく、利用者の生活状況を把握し、希望に近い暮らしができるよう相談に応じ、提案するのが役目。がん患者を在宅で面倒見た家族から『支えてもらったおかげで、いい最期を迎えられた』と言ってもらえた時などは、やりがいを感じる」という。

在院日数を短縮する国の方針から、在宅で過ごす重症者

が増えている。同センターでも、約150人の利用者のうち、導尿や経管栄養など医療器具を装着した人が約7割と10年前に比べ倍近くになった。こうした状況の中、訪問看護のニーズが高まる。

しかし、サービス提供態勢が十分に広まっているとはいえず、全国の訪問看護ステーション数(2008年現在54770か所)、利用者(同約28万人)ともに微増にとど

まっている。人材不足も深刻だ。同ステーションで働く看護職は、看護職全体のわずか2%。全国訪問看護事業協会の調べでは、この半年間に人員不足を理由に訪問依頼を断った事業所は全体の約4割を占めた。同協会常務理事の上野桂子さんは「近くに医師らがおらず、一人で利用者の状態を判断し、ケアを提供しなければならぬことなどを負担に感じ

る人が多  
い」と分析  
する。

大阪市平  
野区では、

こうした負担感を少しでも解消しようと、区内の訪問看護ステーション36か所の新任職員を対象にした合同研修会

を始めた。厚生労働省の研究事業の一環として、9、11月に計7回開催し、介護保険制度の概要や医師との連携の仕方などを学んでいる。

9月から同区医師会訪問看護ステーションで働く奥田美幸さん(35)は「外来勤務が長かったので、異状の早期発見や介護者への助言を一人で出来るのか、不安は大きい。それだけに訪問看護に必要な技術や知識を学べる研修会はありがたい」と喜ぶ。

同ステーションには、就職の問い合わせが増えているといい、同管理者の立石容子さん(38)は「教育態勢を確立することで、訪問看護に興味を持つ看護師が巨額のごとなく挑戦できる環境を作れば」と期待を寄せる。

## 在宅生活支える「訪問」



寝たきりの女性の胸に聴診器をあて、体調を調べる山崎さん(兵庫県西宮市で)

### おとどちもの詩

なべの中は 決戦場！  
鶴山 祐子  
夕ご飯の後で なべに水を入れた  
すると ミラーボールのように  
ういた油が光り出した  
洗さぬあわを落とすと サツと  
ミラーボール軍が退きやく  
——と思ったら あわを口で  
攻め返す スポンジを持ったまま  
この勝負の行方を見つめている  
(横浜市・相武山小5年)

◆  
食事のあと、食器洗いをすると  
わかるよね。食器洗いというのは、  
すべて油との戦いなんだ。  
(長田 弘)